

第二部 パネルディスカッション —日本語教育における実践研究とは何か—

実践研究フォーラムの「今とこれから」

堀井恵子（武蔵野大学）

0. はじめに

【スライド1】

堀井です。細川先生は22分だったので、15分にしたいと思います（笑）。一生懸命メモを取っていらっしゃる方もいらっしゃると思うんですが、パネルの内容もWEB版の方に載せたいと思っておりますので、ちょっとご期待ください。

私のタイトルは「今とこれから」、主に「これから」をお話したいと思いますが、キーワードとしては、「学び」それから「ことば」、そして「より良い実践のために」それから「デザイン」「振り返り」「教育観」、欲張りですが、「共有のための記述」「実践とデータ」、こんなにたくさんのキーワードになっています。

1. 実践研究にかかわった経緯

【スライド2】

一応お題として、実践研究に関わった経緯を述べよというのが委員の方からありましたので、えー実は、一日本語教師として日本語学校で働いていた頃に才田先生の企画した「私の工夫、私の失敗」で失敗を語ったことがあります。で、その後ですね、日本語教員養成に関わるようになると、どうしても教員養成をする中で、中身だけでなく、実践のことで取り上げなければならなくなりますので、実践研究に関心を持ちました。それから、アカデミック・ジャパニーズ教育研究の中で、学びとか言葉の教育のことは見てきたとき、それから、最近の仕事の日本語ということも関わっていますけれども、こういう研究をするときに、実践研究という形での共有、共有の仕方として実践研究という方向しかないのではないかというふうに考えています。

【スライド3】

実際にどんな授業をしているかという、教員養成の中では、実習とか、それから論文指導も随分多いんですけども、その中には実践研究の論文もあります。それから、「Project-Based Learning」による授業をやっていると、こういう新しい試みをするときには、やはり自分自身が実践研究をして、振り返りをして、授業実践を修正、改善していくことは非常に必要だというふうに思っております。

で、何よりも実践研究フォーラムの委員になってしまいましたので、4年間実践と向き合い、今、細川先生が「やってみて思った」とおっしゃったのですが、たぶん、実践研究というのは、やっていてわかることがすごくたくさんあるんじゃないかと思います。私も、実践研究は何かとか、どこに向かっていくのか、というのは、やっていてひしひしと4年間感じてきたように思います。

2. 実践研究フォーラム' 04~07 まで (第1ステージ)

【スライド4】

少し歴史的なことから言うと、細川先生は語りませんでした。04年から07年までの間、私達は第一ステージと呼んでいます。その時は、実践研究とは、さっきもおっしゃっていたように、それは何かわからないものとして始まったので、それは何かという問いが随分続いていたように思います。実践研究は必要なのか、そしてそれをフォーラムでどのように共有するのか、そして良い実践研究とはどのようなものなのか。これは、館岡(2010)¹で、PDCAが実践研究であることの共有がこの第一ステージでできたのではないかということが書かれてあるんですけども、その辺は、書かれている通りだと思います。共有できるんじゃないかなと思います。

【スライド5】

07年までのテーマは、ここには元委員の方もいらっしゃるようですが、どのように広く振り返り検証するのかとか、その結果をどのように実践の改善に結びつけていくのか、そしてその際にはどのような工夫、問題点、課題があるのかといったことが問われてきました。

3. 実践研究フォーラム第2ステージ' 08

【スライド6】

で、ベースとしては、次に「実践研究からの発信」というのがありますが、08年は「記述・分析そして共有へ」というタイトル、09年は「実践を見せる記述・実践が見える分析」、そして昨年は「現場の「問い」を「研究」にする記述・分析」、これらを委員の間で話し合っていて、最初にお話があったように、日本語教育の分野の外の先生方のお話も交えながら、パネルの中で問い続けていきました。ここではやはり「記述」というものがキーワードになってきたかと思います。そして、それらの結果ですね、実践研究をもう一度ここで問い直してみようということになりました。

【スライド7】

第二ステージの背景としては、細川さんからもありましたけれども、査読をしている方たちの声として、「実践研究では客観性がないのではないか」とか、「方法論が見えない」とか、他の分野の方からは「科学的ではない」とか、「仮説検証がされていない」とか、そのような話がありました。日本語教師の中でも「研究論文としてはどうなのか」とか、「質的研究は評価される」のか、博士論文になると分量を越えてしまうとか、いろんな実態もありました。地域の日本語教育でもひとつ大きな課題になったと思います。

そんな中でこの前、細川さんと話していた時に、「日本語教育学の時代になった」という話になりました。私はあまり気づいていなかったのですが、このことは大きいと思いました。日本語教育学の時代とは何なのかと考えた時に、実践研究フォーラムをもう一度考えてみるのはいいと思いました。

¹ 館岡洋子(2010)「【緒言】実践研究は何を目指すか」『早稲田日本語教育学』第7号, pp. i - v

4. 実践研究をめぐる人々

4-1. だれのための実践研究？

【スライド8】

ここで、実践研究をめぐる人々について考えてみたいと思います。誰のための実践研究かということですが、実践研究をしている人もいれば、実践研究を推進している人、批判している人、その中には実際には実践研究をしていない人もいます。実践研究の研究など、実践研究に関する研究をしている人もいます。それから、研究はしていないけれども、実践をしている人もいれば、研究をしている人もいます。そして学習者がいますよね。

4-2. 再び・・・実践をよりよいものにするためには

【スライド9】

誰のための実践研究かと考えた時に、実践者が実践を振り返る、ということにもう一度立ちかえてみようと思います。なぜその実践を行ったか、その結果何が起こったか、課題や改善策は何かということを考えてときに、大事なものは共有のための記述、奥田さん、才田さんもおっしゃいましたが、実践への還元ということ、大きく捉えて見ていく必要があると思います。

4-3. 実践者の課題

【スライド10】

一方、実践者の課題というと、日本語教育関係者は本当にみんな忙しいですね。日常の業務などに追われ、夜中の2時、3時にメールが飛び交うようなことも多いわけですから、大変忙しい中で、でも、意外と孤立している先生もいるのではないかと思います。忙しいんだけれども、本当に話したいことを話し合える相手がいない。で、話し合いたいことを話し合えることを含めた実践の発表の場というの、今は少なくなっているのではと思います。やはり実践を共有し考え合う相手、記述の仕方、授業データの取り方、そういったものが実践者の課題としてあるのではと思います。

5. 論点1：実践研究のこれから

【スライド11】

実践研究のこれから、を考えると、いわゆる研究論文に縛られていたように思います。新しいパラダイムを考えると、新しい研究の形があるのではないかと。よりよい実践のために、自らの研究観を問い直すために、質的研究として説得力を持つだけの記述量を含められるWEB版などによる発表の場が必要ではないかと思います。研究というものの形を考えなくてもいいと思います。これは後で論点にしたいことでもあります。

【スライド12】

ここでもう一度、フォーラムのコンセプト、それは、参加者一人一人の発信を軸に、参加者それぞれが日本語教育の実践について考え、議論することで、実践と研究の関係を自分の問題として捉え、新たな実践への視座を得る場を提供するというものです。

6. 論点2：実践研究フォーラムのこれから

【スライド13】

これを考えた時に、実践研究フォーラムのこれから、これはやはり、学会の大会とは違う、発題者にコーディネーターが寄り添う形、中にはうるさいとおっしゃる発題者の方も今までいましたけれども（会場 笑）、たくさんのやりとりをしていて、で、中には大変だから、もう委員はやりたくないとおっしゃる方もいるんですが、私は委員をやる中で、かなり委員も多く学んできたんじゃないかと思います。この寄り添う形というのも、やっぱり引き続き、あったらいいなあと思います。そして、たくさん実践研究が発題され、議論され、盛り上げていく場というのがフォーラム。で、これが実は研究の場。先ほど、最後の細川さんの話と同じかなと思いました。

ですから、研究の形が変わっていくということも、私はいくつかの研究会をやっていて、すごくそれが面白いなあと思いますね。なので、もしかしたら、こういう場が本当の研究の場所、研究なのかなあというふうに思っています。ただ、実際の応募とのギャップとか、現実問題として認められるのと、そのあたりの調整というところがあるかと思います。ちょうど15分で終わったと思います。以上です。（会場 拍手）